
正義の味方の異世界修学旅行

蒼紅翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正義の味方の異世界修学旅行

【Nコード】

N6933P

【作者名】

蒼紅翠

【あらすじ】

ゼルレツチ老の突拍子も無い思いつきにより異世界へ飛ばされる衛宮士郎。しかし飛ばされた先は時間樹に存在するいくつかの世界の一つ、『元々の世界』だった。Fate/stay nightと聖なるかなのクロスオーバー物です。

Prologue (前書き)

押入れから『聖なるかな』が出てきたので今日からプレイしながらふと同時に書いていこうと思いました。

FateはEXTRAまでやって現在魔法使いの夜待ち。永遠神剣シリーズはアセリアから聖なるかなまで。それと聖なるかな外伝は買って来たにもかかわらずインストールもせずに積まれてる状態です。

完走どころかゲームすらうまくクリアできるのか分かりませんがまったりと書いていきたいと思うので生暖かい目で見てください。い。

Prologue

気がつくとそのは見慣れぬ森の中だった。時間帯は正午ぐらいだろう。

「はあ……………」

溜息をつく。それもこれもまたあの爺さんの気まぐれが原因だ。

遠坂の大師父、宝石翁キシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグ。

ふらつと現れては修行だとか言っただけを攫って行くある意味俺の師匠だ。

しかし、連れて行かれる場所がアインナッシュの森やアルトルージュの城等無茶苦茶な

場所ばかりだが。

「にしても突然、『今からお前を適当に飛ばすからそこで修行して来い』ってなんでさ……………」

その上直ぐに帰って来たらもう一度別の所に飛ばして世界の繋がりを切るとまで言われた。

あの爺さんの事だから最低でも一ヶ月はしないと駄目だろうな。

直ぐに戻る事は諦めて地面に魔力を込めた宝石を埋めておく。また帰る時に来る事になるからだ。

爺さんが言うには俺を飛ばした場所が唯一元の世界とのパスが繋がっている場所になるらしい。

ここでも俺の投影した不完全な宝石剣でも人一人ぐらい通れる穴が空けられるそうだ。

遠坂見たいに平行世界から魔力を吸い上げたり出来ないし爺さんが世界間のパスを

繋いでおいてくれないと使えないし帰る時ぐらいにしか使えないけどな。

「辛い近くに町があるみたいだしまずはそこで情報収集でも……む？」

そう遠くない場所で強い魔力をいくつも感じる。

近づいてみるとそこには大きな学園があり、何者かが戦っているようだ。

普通ならまだ学生が授業を受けている時間帯だろう。ならば迷うことは無い。

着慣れた聖骸布の外套を投影して羽織る。

さあ、正義の味方を始めよう。

s i d e S A T S U K I

「あーもう数が多すぎるのよ!」

二十体目のミニオンを切り裂きながら少し後退する。これで大体三分の一。

キリが無いから流石の私も体力が尽きてきたわ。

三体ほど校舎の中に入れちゃって焦っちゃったけどそれは望君が倒してくれたようね。

望くんの覚醒を早めてしまったけどこれで私も戦闘に集中でき・・・

「……………って嘘!？」

突然私も知っている力が望君に激突した。これは急がないとかなりまずいかもしれないわ。

でも助けに行こうとしても目の前の奴らを対処しないと

ここから動くことすらできないじゃない！

「早く望君の所へ行かないと　　！」

半ばヤケになって叫びながら光輝を振るった。タリアとソルラスカが間に合わなかった以上、

ここに私の味方なんて一人もいないのだから全部私が何とかしないと。

「　　ならここは俺が引き受ける」

しかし突然赤い外套を着た男が敵に立ちふさがるように私の目の前に現れた。

神剣使い？いえ、白と黒の双剣を持っているけどあれは神剣じゃない。

何か不思議な力を感じるけど、それでも神剣には遠く及ばない。

「あなたは！？」

「話は後だ。ここは足止めしておくから早く行ってくれ」

「でも神剣もないのにミニオンと戦える訳が……………」

そう言い終える前に彼は一瞬でミニオンに接近して即座に二体を倒した。

嘘、神剣も持っていないのに私もミニオンも反応すらできないなんて。

「ああそうだ、いい忘れてたな」

彼は軽い調子でそう言う。

「足止めするのはいいが、別に全て倒してしまっても構わんのだろう?。」

とさも当然のように言い切った。その言葉を聞いた瞬間。

「お願い!」

と即座にその場から離脱して望君の所に走る。

何故だか分からないけど彼なら大丈夫な気がしたから。

お願い望君、私が行くまでもうちよつとだけ耐えて頂戴。

side SATSUKI out

助けた少女がかなりの速さで校舎の中に戻って行くのを横目で確認する。

きつと彼女の仲間を助けに行くのだろう。それにしても学園のすぐそこまで来た瞬間、

昼だったのがいきなり夜になったのは驚いた。

確認すると何故かこの学園の周りだけ時間がずれているらしい。

時間を歪ませるなんて、五つの魔法の一つである時間旅行に片足が入ってるぞ。

まさかこの学園に魔法使いでもいると言っただろうか。可能性は高くはないが、

決してありえない訳じゃ無い。

「まあ、余計な事を考えるのはこいつらを倒してからだな」

何の抵抗も無く2体倒せたが、それは不意をつき、

肉体を強化して接近して抵抗される前に切り伏せたからだ。

敵の消え方と言い、どうやら精霊の類であるらしい。

全身から魔力を感じ、且つ身体能力もかなり高いようだ。

うまく不意をつけたからよかったものの、本来ならもう少し苦戦す

るだろう。

まあこの数でも負けるとはまったく思わないが。それに不意を付けば勝てるのなら、

その不意を作ればいい。

何しろ俺は、戦う物では無くて創る者なのだから。

トレスオン
「投影開始」

自身が持つ二十七本の魔術回路の一本一本に流せるだけの設計図を流していく。

その数は百三十五本。最初は魔術回路一本につき設計図一枚ほどしか作れなかったのだが、

自分の回路が神経と一体化している為に使っていく内に鍛えられ、魔術回路がどんどん

太くなっていき、今では回路一本につき無名の名剣クラスなら五枚は通せるようになった。

爺さんによると幼少の時からずっと新しく魔術回路を作り続けているのが原因らしいが、

おそらく他の人には同じ事は絶対にできないのだろう。なんせ毎回毎回死に掛けるのだから。

それなら遠坂の様に宝石に魔力を込めた方が絶対に効率が良い。

「
ロールアウト バレットクリア
工程完了。全投影待機」

作り出した剣群を自らの内に待機させておく。

敵を確実に殲滅するにはもう少し引き寄せる必要があるからだ。まだだ
今！

「
フリーズアウト ソードバレルフルオープン
停止解凍、全投影連続層射！」

俺の頭上から魔力で構成された剣群が敵の塊に向けて降り注がれ、
流石に予想外の攻撃だったのだろう、反応出来無い敵を全て貫く。

何しろこんな技を使うのは世界広しと言えども英雄王であるギルガ
メッシュと

贗作者で異端の魔術使いである自分の二人位だろう。

自分の一つの可能性である英霊エミヤを含めるなら三人だが。

敵がこれ以上いないのを確認すると俺は校内へと急ぐ。

少女がこの数の敵より仲間の方を優先した位だ、そっちはかなり不
味い状況なのだろう。

そう判断した俺は校舎の方へ走り出した。

s i d e S A T S U K I

私と望君がなす術も無く弾き飛ばされた。まさかこれ程までに強いとはね……。

これは体力が完全に戻った私でも勝てないかも知れないわ。

「これでチェックメイトだ」

全く感情が読めない顔で暁絶君が私達に向かって詰めを宣言する。

「何で……何でなんだよ絶……」

隣で項垂れていた望君が呟く。確かに暁君は最近では理解できない行動を取っていたが、

少なくとも紛いなりにも友人である私達に刃を向けるような人間ではなかった。

暁君がゆっくりと望君の方に近づいていき

「さあ……目覚めるがいい……破壊の神よ」

満身創痍ですでに身動き一つ取れない望君に向かって神剣を振り上げた。

「望君！」

「望ちゃん！」

私と希美ちゃんが悲痛な声で叫ぶ。ダメージの性で望君を庇う事も出来ない。

私は次の瞬間に起こるであろう光景に、思わず目を瞑り。

「そこまですておいて貰おう」

聞こえてきたのはさっき校庭で聞いた声だった。

s i d e S A T S U K I e n d

何とか間に合った。少年に振り上げられる剣を見た瞬間、

足に強化を施して間に入り投影した干将・莫耶で受け止めたのだ。

無茶苦茶な強化と自己埋没の詠唱無しでの瞬間投影により、

足の筋肉が断裂して魔術回路が焼けつきかけたが、少なくとも間に合ったので良しとする。

そのまま押し返し、痛む足に魔力を通して痛みを和らげると敵に殺気を込めて睨み付ける。

先程戦った敵の集団と違い、今度は人間の様だ。

元々この学園の生徒であろう制服を着た彼の剣を解析しようとするが・・・やはりできない。

彼の剣だけでなく助けた少年やさっきの少女の剣どころか、先程の集団の武器全てが

解析出来なかった。何か特別な代物なんだろう。

何故なら俺の持つ解析は最高クラス、さらに剣と言う分野に絞るなら宝石剣すら解析できる。

流石に理解できない物を無理やり理解しようとする頭痛によって完全には出来ないが。

そんな俺が解析出来ない様な物となると例外もあるが英雄王の乖離剣のような最高位クラス

の神秘か、剣その物に意志が付加されてるかの二択。

前に爺さんが見せてくれたインテリジェンスソードは全く解析が出来なかった。

爺さんが言うには剣に意思を持たせたことによって属性が剣から微妙にずれる上に、

俺はそれを一つの生命体として認識してしまっているらしいから性質が悪い。

閑話休題、きっと彼らの剣はインテリジェンスソードの類なのだろう。

間違っても前者であって欲しくない。

乖離剣の様な威力の斬撃で斬り合いでもされたらこっちはたまったもんじゃないし、

簡単に一つの街が滅ぶ。

等と余計な事を考えていると。

「……………せない……………」

少年の傍にいたもう一人の少女がゆらりと立ち上がり俺すぐ横までふらふらと歩いてきた。

普通の人よりも少しばかり強い魔力。それが

「殺させない……………望ちゃんは……………絶対殺させないッ!」

「「「!?!」」」

爆発したように一気に跳ね上がった。敵が何かを警戒するように距離を取る。

すると、空間が歪み、少女の手に彼女の身長ほどもある大きな鎌が現れた。

「う……………そ……………?希美ちゃんも……………な……………の……………?」

後ろで魔力の余波に当たって気絶でもしたのか、それとも少年よりダメージを受けていたのか、

少女の方が倒れた。

「望むちゃんを死なせない……………。望ちゃんを死なせない、絶対に」

「……………イレギュラーが混じったが、ようやく役者がそろったようだな」

「くお—————ん!」

何かの咆哮と激しい振動。高まる魔力と共に振動はどんどん激しくなり、

目に映る全ての光景がぶれて見える。

「ああ……あああああああああつ！」

「覚醒の余波で、自意識を失っているのか……」

敵が刀を収め、冷静にそう判断する。

「希美……しっかりしろ、希美！」

倒れていた少年がふらつきながらも少女をささえる。

それを少しだけ眩しそうに見つめた彼は背を向け、この場所から離脱しようとする。

「絶ッ！」

「……お前の命、預けておく」

彼は振り向いて少年にそう告げると今度は俺の方に向かって。

「邪魔をしなければ飛ばされずに済んだものを。……まあいい。それでは、良い旅を」

「旅？」

旅と聞いた俺はやっと気がついた。これは何回か体感した事のある感覚。

つまり意味する所は

「世界間転移か!？」

「ご名答。放り出されなくてはならないからしっかり守っておくんだな」

そう言われた俺は慌ててその場にいた全員の足に縄を投影して引っ掛ける。

気がつくと彼はいなくなっていた。

「くおーーーーーん!」

咆哮と何故か浮遊感。慌てて外を見るとそこには信じられない光景が広がっていた。

は……? 飛んで………る?

「な、なんでさあああああああ!」

そして俺はこの世界に来て三十分も立たない内にこの世界からいなくなつた。

Prologue (後書き)

< 言い訳と言う名の補完 >

最初にこの作品の衛宮士郎はFateルートとUBWルートを足して二で割った存在です。

大体はFateルートなのにセイバーに鞘を返してなかったり、宝石剣を投影できたりします。

年齢は20歳。大学には行かずにNGOとして各地を回ったりしながら本業の正義の味方してます。

それとゼルレッチ老に毎回不条理な場所に連れて行かれてるので大体の能力が上がっています。

大体UBW終了時の士郎君以上アーチャーさん以下ぐらいの能力です。

< 今後の方針 >

一応大筋としては聖なるかな本編をなぞる形を基本として進む予定です。

脳内的には最後は半分ぐらいオリジナルになるかも。

それと今士郎君にオリジナルで神剣装備させて投影の使用を少なくするか、

それともこのまま投影メインにしようか迷ってます。

両方とも別に弱体化するって訳でもないしなあ……

追記：士郎君には投影メインで頑張って貰う事になりました！

後感想で要望とか批判とか妄想とか受け付けてますのでよろしくお

願
い
し
ま
す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6933p/>

正義の味方の異世界修学旅行

2011年1月9日03時18分発行